

役者絵は、いわゆる浮世絵の一種で、歌舞伎役者の姿を描いた版画です。多くは特定の人気役者をモデルとしていて、現代のプロマイドと同じように、熱狂的なファンの希望にこたえて作成され、販売されました。

元禄時代に、はやくも人気役者の姿を描いた大判の絵本が刊行され、初代市川團十郎や中村七三郎達の演技を彷彿とさせてくれます。ただし当時はまだ墨一色で刷られていました。

やがて明和（1765）頃、彩色された美しい錦絵が創始され、役者絵も似顔を色彩で描くようになります。中でも東洲斎写楽は有名です。こうした似顔絵の傾向をおしすすめ、大量の役者絵を描いたのが歌川豊国、国貞、国芳などの歌川派の人々でした。

今回は、こうした幕末の絵師によって描かれた、当時の人気役者を見ていただこうと思います。作者でいえば『東海道四谷怪談』などを書いた鶴屋南北の時代。

余りの高い鼻とするどい目付きゆえに、共演者が圧倒されたという五代目松本幸四郎、市川家の権威を守った七代目團十郎、美貌で薄命だった八代目團十郎、あふれる色気の五代目・六代目の岩井半四郎、舞踊の名手坂東三津五郎、やや時代は下がって後に五代目尾上菊五郎となる家橘。

今、役者絵を見ても、当時の舞台の魅力が伝わってくるようです。



市村羽左衛門



松本幸四郎



七代目 市川團十郎
八代目 市川團十郎



八代目 市川團十郎